

# “Lizzie Leigh”

— 「放蕩娘」の挫折 —

波多野葉子

## 序

“Lizzie Leigh” (1850) には奉公先で妊娠し道を踏み外した娘を赦し、家族として再び迎えようとする母の姿が描かれ、赦す根拠として聖ルカ福音書 (15 : 11-32) の「放蕩息子」のたとえ話を読む母の姿が繰り返して描写される。本作品はこの「罪を犯し死んだと見なしていた者を受け入れる」というたとえ話のテーマを軸とし、キリスト者として神の寛容と赦しに倣うよう母が家族に求め、リジーを故郷に連れ戻す過程が描かれている。しかしリジーは子供を亡くしたばかりか故郷で正員とはなれず贖罪の人生を送る。つまり「放蕩息子」のたとえは「放蕩娘」には完璧には機能せず、赦しと更生というテーマは不完全燃焼で終わる。しかし物語の舞台である 1830 年代イングランド、特に北部の農村には婚外子が多く、母親も出産後結婚し共同体で生きることが可能であった。本稿では 1836 年の北部イングランドとの舞台設定にもかかわらず、なぜ「放蕩娘」のメッセージが挫折したのかを考察する。

## 1. 「放蕩娘」のメッセージ

物語は冒頭から「赦し」というテーマを提示しており、1836 年のクリスマスに父親が道を踏み外した娘リジーを今際の際に赦した後、非情な自分への神の赦しを乞う場面で始まる。ここで「父が改心した放蕩息子を優しく受け入れる箇所にくると、しばし読むのを休み、気分が明るくなるのを感じる」(5) アンの優しさと、「娘は死んだものと思え、決して娘の名を出すな」(7)、と命じていた夫の厳しさが対比される。そして「厳しすぎるとは思いながらも父の容赦ない怒りに同調」(7) する長男のウィルは「放蕩息子」のたとえを苦々しい思いで聞き、父が赦した後も「家族の恥となった妹を殴り殺したいほどであった」(8)。

一家が居を移したマンチェスターでは、マグダラのマリアのようにリジーの更

生を信ずべきだと述べるスーザンはアンと赦しの精神を共有する(19)。ここで妹が「死んでいた方がましだとさえ思う」(12) ウィルとスーザンの対比が鮮明になる。

ともあれ「放蕩娘」は母のもとに戻り、「放蕩息子」のたとえに流れる「赦し」の精神は成就したかのように見える。旧約の厳しさを体現する男性達と新約の慈悲を体現する女性達の対比では女性達の慈悲と赦しが優位となり、「放蕩息子」を赦し受け入れるという聖書の教えを「放蕩娘」リジーの更生にも適用しようとする作者の試みが様々な箇所に見られている。しかし、その試みは帰郷したリジーの姿には実を結ばず、不完全燃焼した形で物語は終わる。

## 2. 「放蕩娘」のメッセージの挫折

「放蕩息子」と異なり、リジーは多くの「罰」を与えられる。まず「罪の子」ナニーは階段から転落し死ぬ。リジー達の帰郷後その子が葬られるのは、祖父が眠る墓の横ではなく、昔クウェイカー教徒が死者を葬った荒地にある墓地であるため、父の赦しが不義の子にまで及ばないことを暗示する(31)。更に墓地は国教会や十分の一税を拒否した廉で投獄されたクウェイカーの墓地であるので、ナニーの日陰者としての存在が際立つ。

さらにリジーは母と人里離れた場所に住み(31)、村の共同体の正員ではないことが示唆される。また滅多に笑わないリジーは上の世界で悲しみがある時には出て来るとあり、悲しみと縁が切れないリジーの一生が提示される。そして贖罪後天国に行きナニーに会えることを祈っていると続く。つまり、リジーの残りの人生は贖罪の人生なのである。アンとスーザンは幸せな生活を送る様が伝えられるが、作品はリジーがナニーの墓前で“weeps bitterly”(31)という描写で終わる。このようにリジーの周りは幸せで満ちているが、リジーだけが取り残されてしまう。当然、作品は読者に哀れな思いを残して終わり、「放蕩娘」には「放蕩息子」のたとえの精神は成就しないことが明白になる。

従って、作品のメッセージと結果とは完全に一致せず、「慈悲」や「赦し」という作品の表向きの主張の底には相反する「懲罰」や「贖罪」が流れることが読み取れる(Uglow 126)。そればかりかギヤスケルがディケンズに送付した原稿ではリジーは母親の情に薄い女性という設定であった。ナニーを戸口に置き去る筋

書きであったものを、ディケンズが子供は直接にスーザンの手に渡し、時折贈り物をさせるように忠告したという経緯がある (Sharps 95)。献身的な母の愛を受けながら自分の子供には冷酷な母では懲罰に値すると判断されかねない、とディケンズは危惧したのであろう。少し変更するだけでリジーの為になると忠告している。

とすると、ディケンズのこの手紙は3月14日付けなので、その後、第1章が3月30日、第2章が4月6日、第3章と4章が4月13日に掲載される迄の間に変更を加えたことになる。作品のどの部分から書き変えたのかは不明であるが、最初の筋は掲載作品よりリジーを贖罪に値する女性として描いていたことは間違いない。ということは、ギヤスケルは「慈悲」や「赦し」より「懲罰」や「贖罪」を重要視していたことになる。これでは「失ったと思っていた者が戻り赦される」というモチーフは破綻せざるをえない。「放蕩息子」のたとえをリジーを赦し受け入れる根拠とすることには初めから無理があったと言えよう。ディケンズの忠告を受け入れ当初の筋を急遽変更したことで「赦し」や「慈悲」の要素が増したが、ギヤスケルの心に残る「懲罰」の要素を消し去ることはできず、「放蕩娘」のメッセージは混乱し挫折したのである。

### 3. 実態

死という「墮落した女性」のお決まりの末路に文学や絵画で慣れている読者には、帰郷し平穏な生活を送るリジーの運命は特に厳しいものとは思えないであろう。またマンチェスターでは12人中1人の新生児が婚外子であったが、更生所に入所した娼婦は圧倒的に家庭の召使い出身であったため (Mitchell 52)、リジーの職業設定は実態に即している。実際、道を外れた結果、娼婦となり哀れな一生を送る女性も数多くいた。しかし一度淪落すると必ずしも悲惨な運命が待っていたわけではない。パーキン (Joan Perkin) によると婚前の性関係や非嫡出子は農村では珍しくなく、妊娠した場合でも養育費を受給し、未婚の母のまま気楽に暮らすこともあったという (182, 184)。さらに、

Up to 1865, if she ran away she could be sent back to her home parish by overseers of other parishes who did not want responsibility for her. Under an Act of 1733,

any man charged by a woman as the father of her illegitimate child had either to contribute toward its maintenance, marry the woman, or submit to imprisonment. (Perkin 182)

という状況であった。従って、定期的な子供手当で満足して暮らす女性もおり、手当不払いの場合は教区の役人が仲裁した。また父親出奔の場合は、教区が嫡出子より高額の手当を非嫡出子に与えたので、未亡人の方が未婚の母より困窮する場合があった(183)。こうした状況下で婚前妊娠は珍しくはなく、1834年にある牧師が式を挙げた20人の貧困女性中19人が妊娠していたという。同棲後に妊娠し結婚するケースが多く、それは粗野な人々のみならずリスペクタブルな人々にも共通していた(184)。実に状況は次のようなものであった—“Among the respectable it was often considered unthrifty and unnecessary to marry a girl who had not given evidence of fertility, but it was taken for granted that marriage would take place when the girl was pregnant . . .” (Perkin 183).

メイスン (Michael Mason) によると、「イングランドの多くの地域で、新婦の三分の一から半数は妊娠」(67) しており、さらに「非嫡出の割合は都市の方が農村部より低く、19世紀中葉のロンドンでの割合は国中で最も低かった(71)。婚前の妊娠は広範に見られ、農場主の娘も農場労働者の娘と同様に婚前に妊娠していた(72)。とはいえ1834年の新救貧法施行以降は未婚の母を取り巻く事情が変わる。

The clauses with respect to bastardy were among the harshest of the 1834 New Poor Law. Unwed mothers were stripped of their right to outrelief. It was no longer possible for her to claim maintenance from the putative father by swearing the paternity – she had to provide corroborative evidence of the man’s involvement. In order to obtain any assistance she had no choice but the workhouse. (Perkin 131)

本作品の舞台は1836年であるので、「2年以上前」(135)に奉公先を追い出されたリジーに以前の法律が適用されたかどうか微妙である。もし新救貧法が適用されたなら、リジーの立場が以前より不利になったことは否めない。冒頭で年代を明記しているのは、それが目的である可能性があろう。パーキンはこの法律は

1844年に破棄されたが婚前妊娠を憚らせることになり、1840年代には非嫡出子の割合は減り始めたと述べているが(161)、メイスンは非嫡出の割合は1850年代にかけて増え続けたと主張している(66)。

このように、婚前の性関係は19世紀イングランドで広範に見られた現象であった(Mason 72)。また低収入のお針子等には、収入を補填すべく時おり売春をする者もあり(Walkowitz 14)、誘惑され妊娠した挙句に捨てられ売春を行うというステレオタイプに沿う者は、最終的に売春の世界に移行する女性の少数派であった(18)。さらに娼婦が堅気の妻になる例もあった。娼婦の末路には二種類の見解があり、マグダレニストによる、娼婦は哀れな末路を辿るという見方と、売春は短期間で終わり、結局は結婚し堅気になるというアクトン(William Acton)等の主張があった(Mason 83)。アクトンは主張する —

“... the better inclined class of prostitutes became the wedded wives of men in every grade of society, from the peerage to the stable. . . . Prostitution is a transitory state, through which an untold number of British women are ever on their passage.” (Wood 138)

メイスンは、「中流階級の主婦層は大勢の娼婦あがりに汚染されている」というアクトンの考えはパニックから出たものだが、多くの娼婦が早晚、堅気の妻になろうとしたとの説は説得力がある(83)、と述べている。アクトンは、1840年にロンドンで自殺をした女性56人中、その半分でさえ前歴が娼婦と断言できる根拠はない、また病死者を除くと大方の娼婦は普通の生活に戻り、多くの女性が売春業を自分の人生として進んで受け入れていたとさえ主張している(Mitchell 54)。ミッチェル(Sally Mitchell)は小説家は性的快楽を得るために娼婦になった者もあるという可能性を無視し、現実的な利益故にその人生を選択した女性については沈黙を保ったと指摘し、一旦道を踏み外すと、売春、飲酒、死が待っていると思われるが、農場や炭鉱、工場で働き、自分の仕事を持つ女性は婚外子を育てることができた、と述べている(53)。

リジーを取り巻く状況を考察すると、リー家は何代も農場を所有する自作農で100ポンド程の預金もあったが、地位は“labourers”の域を出ていなかった。旧式の母屋や納屋等と7エーカー程の痩せた土地にしても、改良する資金もない暮ら

し向きであった(5)。当時の実態を考慮すると、こうした経済状況下でも世間体を重視するリジーの父と兄の姿勢は、ヴィクトリア朝中産階級のリスペクタビリティに沿ったものであろう。しかし地域差もあるが、北部や西部では未婚の母は自活する場合が多かった、とパーキン指摘している(183)。ちなみに、リー家の住む村はマンチェスターから北北東へ15キロ程に位置し、この地域に該当する。リジーはミッチェルが指摘する、中産階級に依存し娼婦に移行する危険性が高い召使いではあったが(53)、作品中にあるように、実家が新婚夫婦の経済基盤になりうる程度の農場であったため、ミッチェルの「問題は性的なものではなく、非自立度であった」(53)、との主張のように、実家に子供と戻り自活の道を探ったり、結婚をするという筋書きも現実離れしたものではなかった。実際には、チザム (Caroline Chisholm, 1808-77) やバーデットクーツ (Angela Georgina Burdette-Coutts, 1814-1906) 等の援助で移民し堅気の妻となる選択肢も存在した。

また、リジーは救貧院退所後、売春に携わっていたように描かれているが、それも一旦道を踏み外すと娼婦になるしか道はないというお決まりの設定である。1800年頃には旧来の家内工業が減り女性の雇用状況は厳しかったが、都市では工場が女性の雇用を創出したし、女性の日雇い農業労働者も出現した。1830年代からは男性同様の賃金を求め団結する女性労働者も現れ、1840年代迄には北部工業地域の女性労働者は他の地域より高い賃金を稼ぎ自立度が高かった。1842年に婦女子の労働が禁止されるまで、過酷で危険ではあったが炭鉱で働く女性もいた。又お針子や婦人帽縫製、洗濯、看護等の賃金は劣悪であったが (Perkin 163)、働き口はあったのである。

#### 4. メッセージが頓挫した理由

作品は時代と場所を明記している為、リジーの末路と実態との乖離は作品の完成度を損ねる。ここで「放蕩息子」のメッセージは本作品の「放蕩娘」には機能せず、相反するメッセージが現れた原因を考察する。

##### 1) 「赦し」のメッセージの背景—ギヤスケルの慈善活動

1832年に結婚したギヤスケルは新婚時代から夫と共に慈善活動に関わり、虐待や搾取を受けていた女性達に接していた。また夫は1820年代末期から1830年

代初期にかけて禁酒運動に関わっていたため、ギヤスケルは飲酒や家庭内暴力を見聞きし、その経験は初期の作品である“*Libbie Marsh*” (1847) 等に反映されている。さらに 1830 年代には極貧女性の救済活動に携わっていた上に、教区での活動では針子の窮状を目の当たりにしていた (Uglove 320)。1837 年には夫と共著で *Blackwood's Magazine* に“*Sketches among the Poor*” を出版しており (Matus xiii)、ギヤスケルが貧民の窮状を知悉していたことが分かる。また、同年に夫が匿名で出版した *Temperance Rhymes* には、リジーと同様の運命を辿る女性が描かれており (Uglove 125)、ギヤスケルが影響を受けた可能性がある。

ギヤスケルはまた 1850 年代迄に大問題となっていた「大社会悪」(Walkowitz 32) にも関心を示していた。当時、売春問題を改善すべく、福音主義派の主導の下に娼婦救済のマグダレニズム運動が展開されており<sup>1</sup>、売春は雑誌等で論争のテーマとなっていた。1849 年にはメイヒュー (Henry Mayhew, 1812-87) による“*London Labour and the London Poor*” が女性の性と貧困に関する問題提起をしていたが、その記事をギヤスケルは熱心に読んでいたという<sup>2</sup> (Uglove 320)。

さらに、1850 年にギヤスケルが前述のバーデットクーツのユレーニア・コッテジへのパスリーの入所をディケンズに依頼したように、ギヤスケル自身も「墮ちた女性」に更生の機会を与えるよう活動していた。ユニテリアンの教義は原罪を認めないため、同派は「人間は環境や事情により罪を犯す」(Tollefson 50)、従って犯罪の温床となる有害な社会環境を改善すべきである、と主張していた。さらに「人間性に対して希望を抱いており (中略) その可能性が発露すべくいかなる援助も惜しんではならない」(Millard 6)、と考えていた。従って罪を犯さざるを得ない環境に置かれた者を、同派の教義に則りギヤスケルが救おうとしたのは当然である。こうしたギヤスケルの信念が作品中に流れる「赦し」の精神を支えたと言えよう。

## 2) 懲罰色の背景

### (1) 文学や絵画による「墮ちた女性」のイメージ

当時、文学や絵画には「墮ちた女性」の哀れな末路が描かれ、ギヤスケルが文学的慣行に囚われていた可能性が考えられる。1840 年代には「墮ちた女性」の物語は沢山書かれていたが、特にギヤスケルが寄稿した雑誌には頻繁に掲載さ

れていた。また誘惑された娘が悲惨な最期を遂げる 1794 年のインチボールド (Elizabeth Inchbald, 1753-1821) 作 *Nature and Art* (1794) と、オーピー (Amelia Opie, 1769-1853) 著 *Father and Daughter* (1802) は廉価版出版や劇化され人気があった。ディケンズは *Oliver Twist*(1837-39) と *David Copperfield* (1849-50) では、淪落した女性を登場させている。改革派の作家であるフランシス・トロロープ (Frances Trollope, 1780-1863) は新救貧法に反対し、誘惑され妊娠したお針子が 1834 年の非嫡子条項により子の父親から援助を受けられなくなった上に、子殺しの無実の罪を負わされる悲劇を *Jessie Phillips* (1843) で描いている。この作品は非嫡出子条項を撤回させる機運を醸成し、1844 年に議会は父親に非嫡出子の責任を課す新法を通過させた (*Victorian Web*)。またミィティヤード (Eliza Meteyard, 1816-79) の “Lucy Dean: The Noble Needle-woman” (1850) 等で転落したお針子の姿が描かれ、お針子と売春の関係性は 1850 年春までには文学上のイメージとして定着していた (Uglow 320)。グレン (Heather Glen) は “Lizzie Leigh” の人気の理由を、読書経験が少ない者達にはペニー・フィクションでお馴染みの筋 — つまり町で墮落し父に勘当された田舎出身の少女が改心する — に頼っている点が受けたと述べている (xv, introduction to *Cousin Phillis and Other Stories*)。

実際、1840 年代から 1850 年代の *London Journal* (1845-1912) や *Family Herald* (1842-1939) 等の家庭向け人気週刊誌には、道を踏み外す女性の話がしばしば掲載されていたが、被害者は無実にも拘わらず死という罰を受ける、という筋が誘惑物語には共通しており、それが読者の期待に沿った、とミッチェルは述べている (13,16)。“Lizzie Leigh” は出版後、劇化や海賊版の出版などに見られるように好評を博したが、これもリジーの運命が読者の「墮ちた女性」に関するイメージと合致したことが一因であろう。

このように、「墮落した女性」の型通りのイメージは、様々な媒体を通して描かれており、リジーの幸せな余生はこのイメージにそぐわなかった。フォスター (Shirley Foster) が述べるように、「苦しみと自己犠牲を通し道徳的な贖罪を果たすことを強調するのは、当時良くあった表現法であった」(Matus 113)。

また少し遅れて 1850 年代になるとレドグレイヴ (Richard Redgrave, 1804-88) 作 *The Outcast* (1851) を始め、「墮ちた女性」の哀れな末路が絵画に描かれるようになる。そうした作品は “Lizzie Leigh” 出版後に発表されてはいるが、絵画でも「墮



ちた女性」が題材となる機が熟しており、社会に「堕ちた女性」のステレオタイプのイメージが定着していたと言えよう。実際、既に挿絵等には「堕ちた女性」が描かれており、ディケンズ作 *David Copperfield* にはフィズ (Phiz, 1818-82) の描いたマーサの挿絵が使用されている。

## (2) ギヤスケルの姿勢

### ① 労働者階級のモラルの向上を目標

本作品の第1章は1850年3月30日創刊の *Household Words* のディケンズの序文に続き巻頭を飾った作品であるが、同誌は初期にギヤスケルが寄稿した *Howitt's Journal* 同様、社会改革に使命感を有していた (Shattock 81)。ディケンズの刊行目的は下層階級の人々の状態及び社会状況全般の改善であり、彼が特に重要視していた教育、住宅環境、衛生状態の改善はギヤスケルの共感を呼んだ (Uglow 250)。ユニテリアンは教育を重視し、労働者のための職工学校、日曜学校、貧民学校などを開いていたし、平日学校は国家が初等教育を開始するまで存続した (Millard 8)。こうした同派の活動目的が社会の底辺の人々の心身両面での改善であったことは言を俟たない。以上の活動はギヤスケル存命中のものであり、ユニテリアンの一員として、貧民の悲惨な現実を改善すべく努力していたギヤスケルが、*Household Words* の社会改革の使命に共鳴し、作品中で読者の注意を喚起すべく、警告の意味も込めてリジーの運命を厳しくしたことも考えられよう。ちなみに1850年代から発表が相次ぐ「堕ちた女性」を主題にした絵画にも、警告が目的のものがあつた。

また、ユニテリアンの啓蒙活動は、“the belief that God created human beings with the capacity to govern themselves with both justice and compassion” (Stoneman, Matus 134) に基づいていたが、それは結果には責任を持つ、という結論に行きつく。従って、環境や教育の影響を重要視するユニテリアンの信条からは、ルースと異なり、旧約聖書の厳しい神に従う父親と兄、新約聖書の慈愛に満ちた神を信じる母の下で育つたにもかかわらず道を踏み外したリジーは、自己の行為の責任を取らなければならない。

さらにユニテリアンらしく、リジーの淪落は教育の失敗が原因であることも示唆している。リジーは母親が甘やかしたので、世間の厳しさを学ばせようと父親

が奉公に出した為(16)、リジーの淪落には両親の責任も問われる。特に都会に憧れる浮薄な性向があるばかりか器量に恵まれ増長した娘を、誘惑の機会が多い都会に出した父親の浅慮は明白である。その様な性格の娘はたとえ宗教的・道徳的に厳しい環境で育とうとも墮落する危険性があり、教育には細心の注意が必要であることを、ギヤスケルは読者に伝えようとしている。この様な点から、リジーが墮落する必然性が暗示されている。

## ②ギヤスケルの不安

淪落した女性に理解を求めたギヤスケルではあったが、リジーを無罪放免にした場合の読者の批判に不安を覚えたことも一因であろう。実際、*Ruth* 出版後の批判に傷ついたギヤスケルは「ルース熱」に罹ったとして、大陸に一種の避難をしている。ルイス (George Henry Lewes, 1817-78) と事実婚の関係にあり醜聞を起こしていたエリオット (George Eliot, 1819-80) でさえ、*Adam Bede* (1859) でヘティを帰国途中の船上で死なせている。ましてや社会的には奇異に見られたユニテリアン (Tollefson 49) とはいえ、牧師の妻がリスpekタビリティに囚われていたことは十分考えられる。

## ③ギヤスケルの性に関する見解

ストーンマン (Patsy Stoneman) は、ギヤスケルは常に自由と指導のバランスが“a law unto herself” (*Letters*, 160) を持った子供を育てる上で重要と考えており、“a law unto herself” は常に彼女の作品では褒め言葉である、と述べたうえで、「性に関しては、ギヤスケルは当時の一般的な考えに縛られており、自己を律せられる大人の女性を生み出そうとする合理的な望みと、女性の“純潔”はその知識だけでも傷つくという不安に折り合いをつけるべく葛藤していた。その結果、少女を自分自身の判断ができるように教育しようと望みながらも、彼女たちが性的な事柄について“a law unto themselves” を持てるような情報を与えるのを拒否するという一貫性を欠く状態に陥った」(Matus 140)、と述べている。そのような性に関する否定的な感情は、未婚の母の容認を躊躇させる結果となるであろう。つまりギヤスケル自身が性の自由を容認しているわけではなかったのが、淪落した女性に対し、贖罪を求めたと考えることができる。

#### ④ ギヤスケルの中庸精神

また、ヘンリー (Nancy Henry) は、*North and South* (1855) を例にあげ、「革命的な変化と漸進的变化がギヤスケルの作品には共存しているが、それは彼女の政治的立場に疑問を抱かせる。(中略) 政治的曖昧さと緊張は彼女の作品の特徴となっている。彼女の作品は 19 世紀英国社会に根付いていた革命への保守的な恐れと進歩的な改革への傾倒を併せ持っている」(Matus 149)、と述べているが、こうした相反する心情は性的な「墮ちた女性」の問題にも存在していたのではないだろうか。

さらにヘンリーは、「ギヤスケルはユニテリアンの、そして人道的な考えを社会正義に関して持っており、キリスト教社会主義と貧しい労働者階級に理解を示していた。しかし彼女は自らの政治信条には確信が持てなかった」(Matus 150)、と指摘している。実際 1848 年にはキャサリン (Catherine Winkworth) に自分の政治的立場に確信が持てない、極右からは離れていきたいが極左も御免だ (*Letters*, 29)、と極端を退ける旨を書き送っている。そして 1851 年には自由貿易支持のマリアンに、何に関してもパルチザンになってはならない (*L*, 148)、と諭している。

こうした点を踏まえると、ギヤスケルは中庸や中道を重んじる性格であったことが窺える。この様な傾向がリジーの罪を赦し母の元に返すという「放蕩息子」の精神に做った筋にはなったが、「不義の子」を産んだ過去まで抹殺する結末にはなりえなかった一因ではないだろうか。その結果、リジーは更生したとはいえ哀れな贖罪の生涯を送ることになり、「墮ちた女性」のステレオタイプから逃れられない結末となった。読者に寛容と赦しを求めようとするギヤスケルの試みも、「墮ちた女性の末路」という一般的概念から完全にはなれなかったと言えよう。「放蕩娘」のメッセージは中途半端な形で挫折せざるをえなかったのである。

#### 結論

以上の原因で作品のテーマである「放蕩息子」のメッセージは「放蕩娘」には完全には機能せず、作品は「赦し」や「慈悲」が「懲罰」や「贖罪」と混在する中途半端な形となった。さらに舞台設定が現実的なため、実態とリジーの末路との乖離は際立ってしまう。思えば墮落した女性に更生の機会を、と明確な意図を持って書かれた *Ruth* でさえも、ルースは見事に更生し “saving angel” として町

の人々に認められたにもかかわらず、譎妄状態で死を迎える。ギaskellはパズリーなど恵まれない状況の故に過ちを犯した女性の救済活動に従事しながらも、フィクションの世界ではステレオタイプから逃れられなかったことになる。本作品は1830年代末期に書き始められたと考えられているが(Uglow 125)、シャープス(John Sharps)が「テクニクが三流作家のものに落ちてしまったことが、痛々しいほどに明らかである」(94)、と結論づけているように、テーマの一貫性という点では、駆け出しの作家の未熟さが現れたことは否めない。作品を発表したのは1850年なので推敲を重ねることもできたはずであるが、一貫性が欠如したまま発表し、このような曖昧なメッセージを提示する結果になった。

#### 注

本稿は第24回日本ギaskell協会例会(2012年6月2日、於日本大学)における発表に基づいている。

- 1 マグダレニズムに関しては拙稿“Evangelicalism in *Ruth*,” *Modern Language Review*, 95-3 (2000), pp. 634-41. を参照されたい。
- 2 1850年には *Westminster* 誌掲載の‘Woman’s Mission’が性道徳に関する二重規範を指摘し、更にその夏には同誌は W.R. Greg の“Prostitution”を掲載し、「放蕩息子」と「放蕩娘」に対する社会の異なる態度を取り扱っている(Uglow 321)。

#### 引用文献

Chapple, J.A.V. and Arthur Pollard, eds. *The Letters of Mrs. Gaskell*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1967.

Gaskell, Elizabeth. “Lizzie Leigh.” *Cousin Phillis and Other Stories*. Ed. Heather Glen. Oxford: Oxford University Press, 2010.

Mason, Michael. *The Making of Victorian Sexuality*. Oxford: Oxford University Press, 1995.

Matus, Jill L. *The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell*. Cambridge: Cambridge

- University Press, 2007.
- Millard, Kay. "The Religion of Elizabeth Gaskell." *The Gaskell Society Journal* 15 (2001). 1-13.
- Mitchell, Sally. *The Fallen Angel*. Bowling Green: Bowling Green University Popular Press. 1981.
- Perkin, Joan. *Women and Marriage in Nineteenth-Century England*. Chicago: Luceum, 1989.
- Sharps, John Geoffrey. *Mrs. Gaskell's Observation and Invention*. Fontwell, Sussex: Linden Press, 1970.
- Shattock, Joanne. "Elizabeth Gaskell and Her Readers: From *Howitt's Journal* to the *Cornhill*." *The Gaskell Journal* 25 (2011). 77-87.
- Tollefson, Loretta Miles. "Controlled Transgression: Ruth's Death and the Unitarian Concept of Sin." *The Gaskell Journal* 25 (2011). 48-62.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.
- Walkowitz, Judith R. *Prostitution and Victorian Society: Women, class and the state*. 1980. Cambridge: Cambridge University Press. 1994.
- Wood, Christopher. *Victorian Panorama: Paintings of Victorian Life*. London: Faber and Faber, 1976.
- The Victorian Web*. <http://www.victorianweb.org/authors/francestrollope/diniejko.html>

(元筑波学院大学教授)

## Abstract

### “Lizzie Leigh”

The Unfulfilled Parable of “The Prodigal Daughter”

---

**Yoko HATANO**

---

Set in 1836, “Lizzie Leigh” attempts to demonstrate the reclamation and redemption of a seduced daughter by her mother who bases her forgiveness and tolerance on the parable of “The Prodigal Son”. However, Lizzie has to lead a penitent life as if the death of her child is not fair retribution. Her seclusion from the villagers after her return home implies that she is not accepted as a rightful member of her community. As a result, the message of “The Prodigal Son” gets confused and frustrated when applied to “the prodigal daughter”, leaving a discordant note at the end.

The realistic setting makes the mixed and confusing message more salient. In the 1830’s, pre-nuptial conception was prevalent and many unwed mothers were able to bring up their children in rural communities, but Lizzie’s hardship is in accordance with the stereotypical fate of the fallen woman.

Gaskell’s incompetence to apply the message of the parable to Lizzie derives from her ambivalence toward fallen women. Her engagement in charitable work to rescue abused and exploited women leads her to deliver a message that Lizzie has to be rehabilitated. Her hopeful view of human nature based on Unitarianism in which human beings are made sinful by their environment reinforces her sympathetic treatment of Lizzie. On the other hand, the negative message stems from her adherence to the literary convention, her intention to use the story as a warning in order to improve the morals of the working class, her uneasiness about the public opinion on the complete tolerance of the fallen woman, her conventional opinion toward sexuality, and her moderate mind to avoid extremes. These factors, when combined, made the parable of “The Prodigal Son” inconsistent with the fate of “the prodigal daughter.”